弓立社という出版思想　目次

第Ⅰ部

1 前口上 2
2 なぜ弓立社なんだろう 4
3 弓立社のイメージ 6
4 八〇年代末から九〇年代初頭の出版と時代の変化 7
5 今世紀における吉本隆明の受容 10
6 神戸生まれの愛媛育ち 13
7 中学時代の読書、及び先生との出会い 16
8 高校、寄宿舎、数学の先生 20

第Ⅱ部

9 学習院大フランス文学科へ 26
10 古本と六〇年安保 28
11 『日本読書新聞』と吉本隆明が僕の学校だった 31
12 六〇年の吉本本出版状況と詩の時代 34
13 社学同に入る 38
14 吉本への関心と注視 42
15 反の会と自立学校 44
16 山口健二のこと 46
17 太田竜の晩年 50

第Ⅲ部

18 学研から主婦と生活社へ 56
19 徳間書店入社 59

20 徳間康快の肖像 61
21 「塀の上を歩く人」 65
22 徳間書店での書籍編集 67
23 吉本隆明『自立の思想的拠点』 70
24 徳間書店の文芸書 73
25 未刊の文学全集 76
26 徳間書店の変貌 80
27 徳間書店を辞める 82

第Ⅳ部

28 弓立社設立 88
29 阿部礼次と北洋社 90
30 試行社、松本昇平、三月書房 93
31 鈴木書店口座開設と直販書店 96
32 『敗北の構造』出版事情 100
33 「風信1」 104
34 『情況』と、『敗北の構造』の「あとがき」 109
35 吉本隆明講演事情 112

第Ⅴ部

36 「生活費は出版以外で稼ぐ」 116
37 講談社の校正十三年 118
38 『敗北の構造』に続く出版 123
39 消費社会における出版と本の行方 126

40 八〇年代を直視する 129
41 『言葉という思想』の出版事情 133
42 小浜逸郎『太宰治の場所』と大友克洋 138
43 鴻上尚史『朝日のような夕日をつれて』 140
44 箕輪成男出版三部作 144
45 猪瀬直樹『日本凡人伝』 150

第Ⅵ部

46 森伸之『東京女子高制服図鑑』 156
47 ベストセラー現象の余波 161
48 スケールとコンピュータゲーム攻略本 166
49 新しい社員たちとその企画 170
50 池永昌靖と『テレクラの秘密』 172
51 弓立社とアルバイトさんたち 176
52 「叢書日本再考」の刊行 179
53 『吉本隆明全講演ライブ集』 181
54 「吉本隆明全講演CD化計画」と販売事情 186
55 未刊の質疑応答集、未収録対談集、『アジア的ということ』、語録集の編集 190

弓立社・スケール・吉本隆明全講演CD化計画、刊行物一覧 192
弓立社出版点数（一九七二～二〇〇七） 吉本隆明全講演ライブ集 203

弓立社という出版思想

インタビュー・構成　小田光雄

第Ⅰ部

1　前口上

――　今回は宮下和夫さんにきて頂きました。まずは宮下さん、お久し振りですと始めるつもりでいたのですが、思いがけずに二週間ほど前、テレビ（「日本人は何をめざしてきたのか⑤吉本隆明自立の思想」、ＮＨＫ教育テレビ、２０１５年1月10日放映）でお顔を拝見し、何か会ったばかりのような気がして、ちょっとちがうかなという感じもあります。でも実際にお会いするのは本当に久し振りなので、これをイントロダクションにさせてもらいます。

宮下　いやあ、見てくれたんですか。本当に恥ずかしい。テレビに出たのは初めてなので、かなり上がってしまいました。それに意外な人まで見ていて、僕も驚いている。うちの近所の老人会のカラオケ同好会の人から見たよといわれてしまった。そんな番組を見るような人だと思わなかったし、ＮＨＫの十一時過ぎの番組だから、よく見たなと思った。

――　そうなんですか。まだきっとこれからもいわれますよ、再放送もありますし。でもとても上がっているようには見えませんでしたが。

ただそれはともかく、このインタビューが宮下さんのテレビ出演と重なったことはとて

もよかったと思っています。意図していたわけではありませんが、結果的に同時期になったのも時代状況の巡り合わせとも見なせますから。

宮下　それはいいんだけど、この「出版人に聞く」シリーズに出るようにと、僕なんかに声をかけてもらった理由がよくわからない。

――　宮下さんはそれを前にもいっておられましたが、論創社の森下さんから我々の世代に至るまで、宮下さんと弓立社の存在はとても大きなものだった。吉本隆明というブランドを持つ小出版社のイメージ、インディーズ出版の範となるのはやはり弓立社であり、宮下さんだと思っていましたから。

宮下　本当にそうなのかな。今日僕は一応俎板の鯉になるつもりできましたけれど、自分が出したもの、つまり弓立社の出版物にあんまり自信がないですね。巻末にリストアップしたので見て貰えばわかりますが、雑然たるものです。だから何で僕が喚ばれたのかという思いは拭えない。一人で出版社を始めたということが珍しかったのかな。

――　それはものすごくあると思います。だから弓立社の場合、宮下さんが想像されている以上に、他の出版社よりも読者が注目したし、編集者から見ても思い入れが強かった。それは水声社の鈴木宏さんもいってました。

2　なぜ弓立社なんだろう

宮下　書肆風の薔薇の鈴木宏さんですか。

――　そうです。

宮下　鈴木さんは何年に出版社を始めたのかしら。

――　彼は一九八一年に書肆風の薔薇を創業し、九一年に社名を水声社と改称しています。

宮下　そうでしたか。僕が弓立社を始めたのは一九七二年だから、そのほぼ十年後ということになるわけですね。

――　宏さんは七〇年代初頭に日仏学院で、徳間書店時代の宮下さんに出会い、大きな影響を受けた三人の編集者のうちの一人だと語っていました。

宮下　あとの二人は誰なのかな。

――　『現代思想』や『エピステーメー』の編集者を経て、やはり八六年に哲学書房を興すことになる中野幹隆、それから『海』や『マリ・クレール』の編集者を経て、九二年

にメタローグを立ち上げ、書評誌『リテレール』を創刊した安原顯です。

宮下　僕だけが異質だね。

――　でもこうしてあらためて時系列を追ってみますと、弓立社の宮下さんを追うように、鈴木、中野、安原さんたちが続いて出版社を興したともいえると思います。

宮下　ちょっとそこら辺がわからないところなんだ。外部の目と自己評価が別だというのはよくわかるけれど、僕も弓立社の出版物も時代状況に寄り添うようなかたちで変わっていった。それに対して、かなり批判された。

――　八五年の『東京女子高制服図鑑』の出版からですね。

宮下　そうなの。それから、『テレクラの秘密』。吉本隆明の本を出していたのに、こんなものを出すとはどういうことだという批判です。

――　私が宮下さんと知り合った頃、次に『東京女子高制服図鑑』を出すんで、おそらく総すかんを食うだろうといってましたものね。

宮下　それらもあって、弓立社が他の出版社より優れたというか、範になるような出版社だという意識をほとんど持っていなかった。これが正直な現実認識だった。

3　弓立社のイメージ

――それもよくわかりますが、弓立社のイメージはすでに七〇年代に確立されていて、それが原イメージとなって、我々の世代まで引き継がれてきた。だから中野や安原も弓立社と宮下さんを意識していなかったはずがない。

水声社の鈴木宏さんの言によれば、処女出版として吉本隆明講演集『敗北の構造』を極小の鈴木書店一社を取次として刊行し、数万部を売るという小出版社としてはベストセラーになったこと、それから本に弓立社通信「風信」がはさまれ、読者に対しての呼びかけに加え、原価計算なども説明公開されていたことが強い印象を与えた。つまりまったく新しい出版社が登場し、しかも吉本本でベストセラーを出したというイメージですね。

宮下　そうですね、取次の選択としての鈴木書店問題と「風信」がかなりの影響と波紋を後続の出版社と読者にもたらしたことはわかります。

――ここにいる論創社の森下さんだって、「風信」の影響を受け、「論創通信」を出している。それからこれは私の場合ですが、まだ二十歳そこそこの学生で出版業界のことは

何もわからなかったけれど、タイトル、及び吉本の「あとがき」にあった、この十八編からなる講演集は宮下さん自らが会場に出向き、テープレコーダに録音した「執念の産物」だという記述はずっと記憶に残るものでした。

『敗北の構造』の出版に関しては後で宮下さんに語ってもらうつもりですが、とりあえずはこんなラフスケッチで、我々から見た宮下さんと弓立社の特異な位置が伝わるのではないかと思っています。

宮下　それは僕にしてみれば、有り難いことだけれど、買いかぶりなんじゃないかという気もする。また一九八〇年代になると、出版物も変わってくるから、そういった好意的なイメージは急速に後退していった。

4　八〇年代末から九〇年代初頭の出版と時代の変化

――　私もそれが気になっていて、月曜社の小林浩さんに確認してみた。彼は六八年に生まれて、八〇年代末から九〇年代初頭にかけてが大学時代だった。

宮下　僕は会ったことがないな。

――　小林さんは未來社や作品社などを経て、二〇〇〇年に現代思想の翻訳書や写真集をメインとする月曜社を立ち上げている。

宮下　ああ、そうなんですか。

――　それで小林さんに弓立社のことを聞いてみたわけです。そうしたら、自分たちの八〇年代はもはや宮下さんや弓立社、それと吉本隆明の時代ではないという。

それならどういう時代だったのかと尋ねたところ、浅田彰や中沢新一のニューアカデミズム、書店はリブロの今泉棚、雑誌は福武書店の『批評空間』、サブカルであれば太田出版の『クイック・ジャパン』だという答えが返ってきた。

宮下　『批評空間』はピンとこないけれど、『クイック・ジャパン』というのはわかるね。

――　もう青土社の『ユリイカ』や『現代思想』、朝日出版社の『エピステーメー』ではなく、時代も変わりつつあったということなんでしょうね。

それと小林さんに聞いてとても勉強になったのは、大学がものすごく変わったということです。宮下さんから我々の世代までは大学内部の人脈でサークル活動や学生運動が営まれ、その延長線上でアルバイトなどもやっていた。ところが小林さんの世代になると、バ

ブル経済の進行とともに外部のバイト人脈、つまり金儲けの人脈のほうが上になり、サークル活動と学生運動は衰退に向かう。それが小林さんが大学生活を送った八〇年代末から九〇年代初めの動向であり、時代と大学の変わり方だったようです。

宮下　吉本さんの『マス・イメージ論』はそうした八〇年代における社会の変容を先駆けて論じたものだと思う。これは「現在」という巨（おお）きな作者は何者なのか、それがもたらすマス・イメージとしてのカルチャー、サブ・カルチャーを問わないそれぞれの「制作品」＝「全体的概念」とは何かを論じている。『マス・イメージ論』は『海燕』八二年三月号から八三年二月号に連載され、単行本化されたのは八四年七月ですから、その月曜社の小林さんの大学生活の変容を予測しているような含みもあるんじゃないかな。

――　私も同感です。『マス・イメージ論』の最後の章の「語相論」で、山岸凉子、つげ義春、大友克洋、岡田史子（ふみこ）、萩尾望都（もと）、高野文子のコミックが論じられている。

出版業界において、コミックが全盛となっていくのが八〇年代で、大手書店チェーンもそれまでなかったコミックコーナーを設けるようになり、大学生協でも『週刊少年ジャンプ』などを置き始めた。このように書店売場にも七〇年代と異なるサブ・カルチャーの時代がまさに出現していた。

宮下　吉本さんは二人の娘さんを通じて、それらのことを知っていたし、理解もしようとしていた。いうまでもないけれど、この二人の娘さんとは後の漫画家のハルノ宵子（よいこ）と作家の吉本ばななです。だからこの時代にあって、娘さんたちが吉本さんに大きな影響を与え、それが『マス・イメージ論』の「語相論」に強く反映されていると見ていいでしょう。

――　当時、宮下さんはさかんにそのことをいっていましたね。

5　今世紀における吉本隆明の受容

それから付け加えておきたいのは、今世紀に入ってからの吉本本に関するエピソードで、私も後で知ったのですが、二〇〇五年に出された『13歳は二度あるか』（大和書房）が静岡県の「中学生向夏休み推せん図書」に選ばれている。

宮下　それは僕も初耳です。あの本は『中学生のための社会科』（市井文学）と同様に、「幻想の」中学生を読者としたものだから、本当に「推せん図書」や「課題図書」になってもおかしくはないけれど、実際に選ばれていたとは知りませんでした。ということは他

県でもあるだろうし、吉本さんが前世紀と異なるかたちで受容されていることがわかる。

――でもその一方で、これもまた驚くことでもないかもしれませんが、次のようなエピソードを聞きました。高校の国語教師を務めてきた私の友人が停年退職を機として、国語授業ノートを出したいといってきた。それで論創社にそれをお願いし、上梓の運びになった。友人は新聞に紹介してもらおうと考え、地方紙の他に全国紙の支局の記者に連絡し、取材を頼んだ。その本の最初の一文は吉本の詩の『固有時との対話』に関するものだった。三十代の記者がやってきて、取材してくれたのはいいけれど、吉本隆明って誰ですかといったので、本当に驚いてしまった。ジャーナリズムにしてもここまできたかと思ったそうです。

宮下　でも三十代の記者だったらしょうがないよ。まさにそういう時代状況にいることは間違いないし、僕なんかはその吉本さんと併走してきたわけだから、やはり弓立社も含めて忘れられて当然かもしれない。それに弓立社も友

人・小俣一平に、無料で譲ってしまったことだし。

――そう、これは断っておかないといけませんね。宮下さんは弓立社を譲られ、二〇一四年に弓立社名で小和田次郎（原寿雄）の『デスク日記』が復刊されていますが、宮下さんとはもはや直接の関係はない。

ただそうした中でも、現在宮下さんは筑摩書房の『吉本隆明〈未収録〉講演集』全十二巻の企画編集者であり続けていますし、また論創社の吉本の『「反原発」異論』にしても同様です。『吉本隆明　質疑応答集』全五巻、『吉本隆明未収録対談集』全五巻も論創社で出されようとしている。『アジア的ということ』も出されるようです。全部で二十数冊になるし、吉本の生前に弓立社で出したものより多くなると聞いています。それらのことは宮下さんが吉本との関係をコアとして、半世紀以上にわたって編集者兼出版者としての生活を持続させてきたことを物語っています。

あえてこのような状況の中で、宮下さんの戦後社会から現在に至るまでの軌跡をうかがっておくことはとても意義のあることだと考えています。その一方で、我々がベースとしてきた出版を中心とする文化構造も解体の時期にさしかかっていることも間違いない。今はその過程にいるし、その来し方というのをたどってもみたい。ちょっと長いイントロ

ダクションになってしまいましたが、本題に入っていきたいと思います。

ところでその来し方ですが、宮下さんが神戸生まれで愛媛育ちだということは、色々と資料を送って頂き、あらためて知りました。それらの資料は読んでいた記憶がありますが、宮下さんの自宅が西日暮里ということもあって、そのことを失念していた。

6　神戸生まれの愛媛育ち

宮下　僕は昭和十七年に神戸の東灘区に生まれ、三歳の時に愛媛に移り、そこで育ち、高校を出るまで過ごしています。

――　ということは一九四二年生まれで、本シリーズ18『小学館の学年誌と児童書』の野上暁さんが四三年なので、ほぼ同世代ですね。

宮下　そうそう、彼は同世代です。17『週刊読書人』と戦後知識人』の植田康夫さんはちょっと上になる。その植田さんが島根の山奥育ちだとしたら、僕のほうは田舎の海岸育ちです。南宇和郡西外海村（現・愛南町）福浦といって、本当に何もないところだった。子どもの頃は隣町というか、郡の中の大きい町にいくには船で渡っていた。十人乗りぐら

いの船です。バスが通るようになったのは中学生になった時で、もちろん本屋もなければ図書館もない。まさに田舎そのものだった。

――　どうして神戸からその田舎へ移ったのですか。

宮下　神戸の大空襲で家に不発の焼夷弾が落ち、親の郷里に疎開し、築百年の農家の母の実家に住むことになったのです。それで都市と地方のギャップを味わった。三歳の頃なんでほとんど意識していないはずなのに、それがあるんですよ。中学になるまでずっとあった。

これが僕のコンプレックスを形成する要因だし、長じて文学に関心を持ち、出版に携わるようになったことにもつながっていると思う。

――　それを具体的にいいますと。

宮下　僕が泳げなかったこともそのひとつで、まあまあ泳げるようになったのは小学校五年の時、普通に泳げるようになったのは大学に入り、水泳教室に通ってからのことです。これは相当大きかった。他にも都会と田舎のギャップは大きかった。みんなと外でも普通に遊んでいましたが、小学生なのに、自意識過剰でした。暗かったとも言えます。

そういうこともあって内向的になり、小さい時から本を読むのが好きになっていく。

『少年クラブ』や『冒険王』などの雑誌、漫画、祭りで買った立川文庫（たてかわ）などの講談本を読んでいた。これらは周りの子どもたちも同じく読んでいたけれど、僕の場合、父が戦前に国語漢文教師だったこともあって、『万葉集』『古事記』『日本書紀』から『唐詩選』『史記』といった古典があった。読まなかったけど雰囲気は伝わっていた。父は明治十七年生まれ。石川啄木、大杉栄、北一輝などと同世代で、江戸時代がまだ真近かの世代です。橘曙覧、大隈言道という江戸後期の近代的な歌人を好んでいて九十九歳で死ぬまで橘曙覧だけをくり返し読んでいました。注釈も一冊分書いています。僕が石川啄木を読むようなものなんでしょうね。僕は五十七歳の時の子で一世代飛ばしているので、変な感じですけど。

旧制中学の国語の教科書は面白かったですね。巌谷小波の『大語園』、『大町桂月全集』などの蔵書があってそんなのをのぞいていた。大町桂月を読む小学生というのは相当変ですね。活字であれば何でもよかったし、総ルビ本も多かったので、それらを子どものくせにむさぼり読んでいた。

――そこら辺の読書体験は世代差もありますが、私などとまったく違いますね。

宮下　そうでしょう。こういう読書をしていたので、地元の連中に違和感を持ってしま

うのは当然だった。表面的にはうまく付き合い、級長もやったりしていましたが、内面的には優越感と劣等感が混じり合ったコンプレックスが渦巻いていた。

――　田舎におけるよそ者のアンビヴァレンツなコンプレックスということになりますか。

ところでそれが小学校の読書体験だったとすれば、中学時代には何を読んでいたのでしょうか。

7　中学時代の読書、及び先生との出会い

宮下　中学になって初めて現代文学にふれたことになるのかな。

まず中学へ入った頃、従兄の家で角川文庫全二十七巻からなる中里介山の『大菩薩峠』を発見し、一日二冊ぐらいのペースで二週間ほどかけて読んだ。これは挿絵が入っていました。

――　角川文庫版の『大菩薩峠』とは懐かしい。グラシンカバーとグリーンの帯だけのもので、私もやはり中学時代に二十巻まで読みました。

宮下　それからこれはここに論創社の森下さんもいるわけだから付け加えておくべきでしょうね。僕はこれまで三度読み返しているけれど、論創社の都新聞版『大菩薩峠』が出るまで、連載時のほぼ三分の一が削除されていたことに気づかなかった。挿絵が全部入っていることも凄い。

――　それは私も同様で、今まで多くの『大菩薩峠』論が出されてきましたが、誰もそれを指摘しておらず、まさにそこが盲点だった。この分野におけるテキストクリティックとヴァリアント問題を考えさせられました。

宮下　僕は吉本さんの講演原稿が初校から決定校に至るまで、実際にどのように手が入り、変わっていくのかを目の当たりにしている。ところが中里介山は単行本化するために逆に削除だけを施したことになる。でもそれはストーリーの流れの中で、不自然なところはあっても読者には気づかれないままに一世紀が過ぎてしまっていた。

――　本当にそれは驚きで、自分たちがどう読んできたかという問い掛けにもなってしまうし、介山自身が出版に当たって、作者、編集者、出版者を兼ねていたことがその原因といっていい。

このことも話しているときりがありませんので、『大菩薩峠』に続く中学時代の読書体

験のほうをうかがわなくては。

宮下　やはり中学の図書室の存在が大きくて、そこには河出書房の『現代日本小説大系』や筑摩書房の『現代日本文学全集』があって、これらを読み始めた。

――　河出の『現代日本小説大系』はＢ６判で全六十五巻、筑摩の『現代日本文学全集』はＡ５判で全百巻、前者は一九四九年、後者は五三年から刊行され始めているので、宮下さんの中学時代には両方とも完結していた。だからこれらの恩恵に浴することができたことになりますね。

宮下　ただ筑摩のほうは全巻は揃っていなかったんじゃないかな。やっぱり最初の河出のほうが小型だし親密感があった。筑摩は三段組でしょう。これは少しキツイ。それに加えて幸いだったのは中学三年になって、明治学院英文科出身の高橋高道先生との出会いだった。英語の先生だったけれど、文学青年で多くの本や雑誌を持っていたので、女の子たち数人と英語を教わるために入り浸るようになり、初めてサルトルの『嘔吐』やカミュの『異邦人』『カリギュラ』、ラディゲといった現代の海外文学を教えてもらった。それだけでなく、先生の生き方から伝わってくるデカダンス的な雰囲気にふれ、僕の長きにわたるコンプレックスから解放されたようにも思った。太宰治やドストエフスキーを本格的に

読み始めたのも先生の存在がきっかけだった。

――　じゃあ、その先生が宮下さんにとって、吉本隆明の今氏乙治に当たる人だった。

宮下　そういっていいかもしれないし、一番大きな影響を受けた。その先生を通じて太宰とドストエフスキーを読み、僕の思考や感性のベースになった。単純にいうと、善悪の問題において、所謂善が悪になり、また悪も善となりうるということを先生と二人の作品から学んだことになる。吉本さんの登場まで、これが僕の基本でした。

――　その先生のことを歌った短歌が旺文社の『中学三年生』に木俣修選で入選したと仄聞していますが。せっかくですから、ここで詠んでみてくれませんか。

宮下　よく知っていますね。それは「新任の前歯の一つなき先生三十五歳とその年を云う」で、時計をもらった。でも不思議というか、僕にも謎なんだけど、それ以来一度も短歌を作ったことがないのですよ。それに先生は二十五歳でした。

――　いってみれば、期間限定相聞歌みたいなもので、先生と訣れたら作れなくなったのかもしれませんね。

宮下　そうともいえるかもしれない。訣れで思い出したけれど、先生からは中学卒業記念として『カラマーゾフの兄弟』をもらった。僕の蔵書で今も残っている一番古い本で

す。

もちろん思春期ですから、これらの高級な本ばかりでなく、漁村だったので、漁師が持ちこんできたエロ雑誌や倶楽部雑誌の類も読んでいた。そういう読書の名残りは現在でも漫画好きとして残っています。

8　高校、寄宿舎、数学の先生

――それから次は高校ですね。

宮下　一九五七年に南宇和高に入学する。高校は郡内に一つしかなく、通学できる距離じゃなかったので、寄宿舎に入った。この寄宿舎生活は自由で、初めて家庭から離れた解放感を味わった。そうした快適ともいえる自由を先輩や同級生、下級生と共有していることから、寄宿舎には一体感があった。

――ちょっとそれは一九五〇年代後半に寄宿舎生活を体験したものしかわからない特殊なニュアンスがあるんでしょうね。私は宮下さんより九つ下なんですが、自分の時代感覚として、一九六七、八年に社会が目に見えて変わっていったと認識している。でも自分